

〔研究ノート〕

# 個人化および私事化するソーシャルキャピタル —R.パットナムの議論の再構成を通じて—

竹本 達也

## — 目 次 —

1. パットナムの議論の要点
2. 問題の所在
3. 抽出されるまなざし——ソーシャルキャピタルの2つの座標軸
4. 個人化と私事化に向けられるまなざし
5. ソーシャルキャピタルの「低減」—その個人化と私事化が意味するもの
6. むすびにかえて

キーワード：ソーシャルキャピタル、私事化、個人化

## はじめに

昨今の我が国においては‘近所’‘近隣’‘コミュニティ’といった術語で括られる関係性の重要性が注目され、それらを充実させるべき方策が焦眉の急になっている。今やさまざまなメディアを通じて、例えば地震や台風やら集中豪雨といった自然災害の被害が喧伝されたり、所謂「ゴミ屋敷」や「犬猫の多頭飼育崩壊」や「騒音被害」等への苦情・告発が世間の耳目を集めたりするたびに、当該の行政機関やNPO関係者はもとよりこれらの事態を受けた近所/近隣/コミュニティ

---

TAKEMOTO, Tatsuya 本学社会学部・准教授、理論社会学、組織社会学、専攻

といった単位における当事者間の繋がりの大切さが強調されるわけである。その際に、様々な処方箋や対応策が模索され提案されつつあるということは改めて確認するまでもあるまい。

もちろん、今日重要性を強調されているのは何も“近所”“近隣”コミュニティ”といった物理的な距離に立脚する関係性に限定されるものでは決してない。インスタグラムやツイッターあるいはフェイスブックやLINEなど、今日急速に普及しているweb上の仮想空間における関係性もまた依然とは比べものにならないくらいの存在感を示し、その重要性を帯びてきている。個人的な悩み事や家庭/職場での相談事が一連の仮想空間で解決策を与えられたり、こうした解決策を求めるのとは別に、単なる愚痴や鬱憤の発散を通じて様々な関係が新たに作り出されたりしている例は枚挙に暇がない。そこに商業的な意味合いが含まれるか否かに関わらず、いまや物理的/空間的な距離を超えて繋がる関係性がかつてないほど社会的な存在意義を持ちつつあるわけである。ここではいま、こうした一連の関係をR.パットナムに倣って「ソーシャルキャピタル」という術語で把握することにしたい。

そもそもこの術語は、1995年に著した論文をもとに彼が2000年に世に問うた主著『孤独なボウリング』(Putnam 2000=2006)の中で定式化したものである。その中で彼は「ソーシャルキャピタル」を「個人間のつながり、すなわち社会的ネットワーク、およびそこから生じる互酬性と信頼性の規範」(Putnam 2000: 19=2006: 14)と定義したうえで、現代アメリカにおいて1970年代以降その繋がりが急速に弱体化し、市民社会を蝕んでいると警鐘を鳴らしたのである。こうした事象を出来させた背景には、都市化・共働き家庭の増加・テレビなどの娯楽の普及および世代経験の変化等があると彼は指摘してみせている。

そこで展開されるこうした議論はパットナム自身が認めているようにきわめてシンプルながら、逆にシンプルであるがゆえに融通無碍な感が否めずある意味で他分野にも応用が利くものとなっている。実際のところ彼の議論は「ソーシャルキャピタル」という術語とともに国内外問わず社会学・政治学・経営学・経済学など多様な学問領域の論者によって紹介されており(例えばEdwards et al 1998, N.Lin2001=2008, DeFilippis 2002, Fine et al2004, 稲葉 2011a, 2011b, 高崎経済大学付属産業研究所 2011, 櫻井2012, 坪郷2015など)それぞれの考察に

において援用されたり批判されたりしつつあるということは言を俟つまい。

ただ、本稿でいま問いたいのはこうした現状を整理することつまり、パットナムの議論を受けて展開されているそれぞれの考察の妥当性を検証することではない。この検証については、それはそれで各分野の知見をふまえひとつひとつ丁寧になされるべきであろう。むしろここで敢えて俎上に載せたいのは、一連の論争の源となっているパットナムの議論そのものである。というのも、彼の論考をふまえた主張や批判が各分野において展開されまさに百家争鳴状態であることを鑑みるなら、ここで一旦原点に戻り、その根幹をなす概念のもつ射程を確定しその有意性を抽出することが喫緊の課題ではないかと考えられるからだ。‘近所’‘近隣’‘コミュニティ’といった術語で括られる関係性やインターネット上の仮想空間で営まれる様々な関係性の重要性を検討するにあたって、こうした作業を通じて得られる知見を反映させることによってはじめて、ソーシャルキャピタルなるものの現在の全体像を彫琢すると同時に今後とるべき方向についてより直裁に見通すことができるのではないだろうか。

以上のような問題関心に立って本稿では、まず次章においてパットナムの議論の全体像を確認したうえで、続く章においてそこに含まれている鍵概念のポイントを精査してみようと思う。そのうえでこれらの射程を改めて検討してから、現代日本社会の分析にもつながりうるヒントを引き出すことにしたい。

## 1. パットナムの議論の要点

『孤独なボウリング—米国コミュニティの崩壊と再生（The collapse and Revival of American Community）』と銘打った500ページをこえる大著をパットナムが発表したのは2000年のことである。そこにおいて展開される議論の要点は、その主題と副題に象徴的に示されているようにきわめて明快だ。すなわち、かつては仲間や友人たちと談笑しつつ過ごされていたボウリングが今や、仲間友人を伴ってはいてもそうした談笑の機会としての性質は失せてしまい、一堂に集いつつも実際のところでは個々人がそれぞれ黙々とレーンに挑むかのような孤独な営みが目立つようになったというのである。もちろん、ここでいう「ボウリング」とは娯楽を含め公的私的な様々な局面で醸し出される他者との関係性つまり

パットナムのいう「ソーシャルキャピタル」の比喩にほかならない。つまり、従来は近隣住民や知人友人との間で育まれていた様々な様態の繋がりが、現在では見る影もないほど弱体化してしまっていると彼は主張するわけである。それにしても、ではそもそも、彼がここで用いる「ソーシャルキャピタル」とはいったいいかなる概念なのだろうか。まずはこの点について、パットナムの名著に沿って改めて確認することからはじめよう。

L.ハニファンらの20世紀初頭の社会的実践家や1980年代以降活躍したJ.コールマンあるいはP.ブルデューらをはじめ、社会学や経済学あるいは都市計画や宗教的实践における専門家らによりなされた先行の論考をふまえた上で、パットナムはこの概念を個人間の繋がりが醸し出す互酬性と信頼性の規範と定式化する。この点は先にすでにみたとおりである。

パットナムによれば、互酬性reciprocityには「特定のspecific」なもの——すなわち、自分に対して何かをしてくれた他者への返礼に相当するもの——と「一般的なgeneralized」なもの——すなわち、特定の見返りを期待することなく他者に対して向けられる貢献の類——の2種類があるのだが、社会における人々の関係性を促進するのは後者つまり「一般的互酬性」にほかならない。というのも、前者に比べて後者は「きっと、他の人が途中で私に何かをしてくれるとの確信confident expectation」を内包しており、人々の間に幅広い信頼trustworthinessを醸成する契機にもなるからである。逆もまた真なりで、「人々の多様な集合の間で頻繁な相互作用が行われると、一般的互酬性の規範が形成される傾向がある」(Putnam 2000 : 21=2006 : 17) と彼は指摘してみせる。だからこそ、それが個人や社会の間に生み出される単なる繋がりとは異なって、「互酬性と信頼性」に深く根ざしたものだという点を強調すべくわざわざ「ソーシャルキャピタル」という術語をパットナムは使用してみせる。

加えて重要なのは、この概念が「個人的側面と集合的側面、私的な顔と公的な顔の両方both an individual and collective aspect ——a private face and a public face」(Putnam 2000 : 20=2006 : 15) を持つとされている点だ。直裁にいつてしまえば、相互の信頼の上に成り立つ個人と個人あるいは個人と諸集団・組織・社会との間に営まれる私的公的な繋がりすべてが「ソーシャルキャピタル」というものなのである。

汎用性に富むこうした位置づけがすでに示唆しているように、それは例えば投票や新聞等への投書・請願または集会への参加や公職への立候補といった政治活動での局面、PTAや地域コミュニティをはじめとして各種ボランティア組織への参画等にみられる市民的局面、あるいは教会が開催する礼拝や勉強会・セミナーといった活動への関与や職場・レジャーや娯楽を介したインフォーマルで私的な局面を含めきわめて多岐に亘るものとパットナムはいう。先に触れたように、彼の用いる「ソーシャルキャピタル」という概念に触発された議論が次々と提出されている背景には、その概念が「社会政策論との相性がよいから」（櫻井2012：29）という事情もあるのだろうが、それ以上にまさに、それが含み持つ汎用性があるのは明らかだろう。すなわちそれは、看取しうるシーンが広範であるがゆえにいくらかでも応用可能なものになっているのだ。

このことは一見すると、この概念が本来もつ意義を薄めてしまうかにも思えるのだが、しかしながらここで一つの類型化を見逃すべきではないとパットナム自身は慎重にも言い添えている。この点にも一応注目しておくことにしよう。「ソーシャルキャピタルの多様性のあらゆる次元の中で最も重要なのは、おそらく、『架橋型』（もしくは包含型）bridging（or inclusive）と『結束型』（もしくは排他型）bonding（or exclusive）の区別であろう」（Putnam 2000：22=2006：19）。彼によれば、前者は様々な社会的分断（social cleavages）をまたいで人々を包含するネットワークであるのに対して、後者は同質のメンバー間の結びつきを強化することで排他的なアイデンティティを生み出す。いうまでもなく、特定の互酬性を安定させるのが後者すなわち結束型ソーシャルキャピタルであり、一般的互酬性と親和的であり結果としてより広い関係性を生み出す。社会的紐帯の強弱に関して指摘したMグラノヴェッターに倣って、“弱い繋がり”と“強い繋がり”のそれぞれ相当するものが「結束型ソーシャルキャピタル」と「架橋型ソーシャルキャピタル」なのだとパットナムはいう。もちろん、両者の類型は明確に区別できるようなものではない。「結束型と架橋型は、それにより『どちらか一方に』社会的ネットワークがきれいに分けられるといったカテゴリーではなく、ソーシャルキャピタルの様々な形態を比較するときに見える『よりその傾向が大きい・小さい』という次元のことといえる」（Putnam 2000：23=2006：21）。それでもパットナムは、両者が交換可能なものではないと考えるがゆえに、ある

種の理念型としては区別することが可能だと指摘するのである。

さて、以上のようにその鍵となる概念を整理したうえでパットナムが行っているのは、1つの時代診断である。彼によれば、かつてはアメリカ社会において確かに存在していたソーシャルキャピタルが1960～70年代以降今日に至るまで、あらゆる局面で急激に弱体化してきている。「何の前触れもなく、この世紀後半の三分の一を通じて、人々は互いから、また自身のコミュニティから引き離されてしまったのである（Putnam2000：27＝2006：26）」。

こうした現象を示す根拠としてパットナムは種々の調査結果を緻密に検証してみせる。

例えば新聞や議員に投書したり公職に立候補したり請願に署名したりすると答えた割合は、1970年代初頭に比べると1990年代初頭では1～2割減少している。政治集会に参加するとかクラブ・組織の役員を務める率に至っては、同時期と比較して3割以上下落傾向にあるという。各種の非営利組織の「会員の大多数にとって、唯一の会員活動とは会費の小切手を切ることか、時折ニュースレターに目を通すことである。そのような組織の何らかの会合に出席する者はほとんどいない——多くは全く出席しない——し、ほとんどの会員は他の会員と意識して出会うこともありそうもない」（Putnam2000：52＝2006：57）。

パットナムのみるところ、人々は公的問題について適度に知識を持った観衆well-informed spectators of public affairsではあり続けているのだが、実際にゲームに参加しているわけでは必ずしもないのである。

こうした事情に至ったのにはさまざまな要因が関係しているのだが、なかでもパットナムが強調するのは、共働き世帯の増加・都市の郊外化・テレビの普及・世代的変化の4つである。順に簡単に整理しておくとな次のようになる。まず日々の生活の大半が労働に費やされるようになり、その「多忙さ」は人々をコミュニティ活動から遠ざけはじめている。かつてはコミュニティや近隣の活動に寄与していた既婚女性がそうした活動に参加する機会が減ってきたというのである。また、従来は主に小都市や農村地域で営まれていた人々の生活は、徐々に大都市へと移動するようになった。自動車を所有する比率も増え生活拠点が郊外に展開するにつれ、それまで営まれていたかつてのコミュニティの関係性は減退・消滅するに至る。かろうじて確保されている余暇の時間も、これまでのように知人友人家族らと面と向かって費やすのではなく、テレビのチャンネルをザッピングしな

がら見たくもない番組に目を向ける行動様式が支配的になってきたのだとパットナムはみる。加えて、戦争体験のない世代が社会の多くを占めるようになった結果、宗教行事や国家やコミュニティ等における活動への参加や関連組織への関与の低下が顕著になった。「若い世代は市民的コミュニティ——居住的・宗教的・組織的な——との繋がりを感じるものが少なくなり、年長の世代とも共有している家族や友人、同僚との繋がりを超えるような、減少を補う所属感の焦点が存在していない」（Putnam 2000：275＝2006：336）とパットナムは断罪してみせるのだ。

## 2. 問題の所在

さてこうしたパットナムの議論は、社会学・政治学・経済学・経営学・社会福祉学・社会心理学等の分野に身をおく様々な論者によって言及・援用されている。肯定的にその議論をとらえるにせよ否定的にとらえるにせよ、彼の議論に触発される形で各専門領域において多くの考察が展開されているのである。このことは、冒頭でもすでに触れた通りだ。パットナムの議論そのものを再吟味せんとする本稿にとって示唆に富むのはいうまでもなく、彼に対して向けられた批判的な眼差しにほかならない。

その批判的的眼差しも実に多岐に亘るものなのだが（鹿内 2006）、N.リンにならってまとめるなら、そのポイントは大きく次の2点に要約できるようだ（Rin 2001＝2008）。1つは、ソーシャルキャピタルの「低減」を測定するにあたって彼が採用した様々な社会的指標の妥当性に関するものであり、もう1つはその弱体化をもたらした要因として彼が挙げた4つの要因に関するものである。順にみていくことにしよう。

すでに確認しておいたように、現代アメリカ社会におけるソーシャルキャピタルを表すものとしてパットナムが依拠したのは、政治的宗教的市民的な局面あるいは職場やインフォーマルな局面における多様な活動であった。労を厭わずに繰り返すなら、それらは例えば政治家への請願や投票・PTAやコミュニティや各種宗教組織への加入や集会への参加・あるいは近隣の友人とのレジャーやスポーツを通じた交友関係などである。きわめて多岐に亘るこうした私的公的な活動を

行う人々の参加の程度や回数に注目したパットナムはその減少・低減を根拠に、アメリカにおいてはかつて盛んだったソーシャルキャピタルが危機に瀕していると断じたのである。

しかし彼自身が述べているところですら、そもそも各種ボランティア活動に限って言えば、1970年代に比べ1990年代には60歳代以上の高齢者の年間の平均活動回数は上昇している。環境保護の高まりや宗教原理主義的な組織への根強い参与そして住民発議/住民投票や自助グループの増加等も確認できる。彼自身もまた小集団・社会運動・インターネット等に関連して、これらが「市民参加の低下傾向に対抗する明らかな例外」(Putnam 2000:180=2006:217)だと認めざるをえない点を決して看過すべきではない。実際のところ、インターネットを通じて公的私的問わず多くのつながりが形成されているとの指摘(例えば土屋2007 Gubbins 2007など)もなされているのであって、このことを踏まえるなら、ソーシャルキャピタルが弱体化しているとするパットナムの見立てはやはりいささか乱暴にすぎるのかもしれない。

そして問題はここにある。すなわち、ソーシャルキャピタルの弱体化という判定を下すにあたって、彼の用いる指標がややもすると恣意的に選び出されているという印象を免れるものではないのである(Kiesling 2000、近藤2011、Fine et al. 2004)。上でも触れたようにある種の局面においては個人的社会的活動が活発化しているにもかかわらず「彼はそうした事実を十分には認めようとししていない」(Kiesling 2000:131)。パットナムもまた、自身が都合のいいデータや指標にのみ注目しているのではないかといった批判や反論を引き起こしうるものであるということを十分に自覚している。そのことは疑う余地がない。だからこそ彼は、第1部の序論にあたる1章や終章のあとに付した「付録」(appendix)の中で、ソーシャルキャピタルの減少を意味しないデータも少なからず存在するというを正直に認めざるをえないのである。そして主著におけるパットナムの主張とは逆に、アメリカのソーシャルキャピタルは弱体化などしていないとの主張が提出され市民参加の減少傾向について一種の水掛け論が散見しているのも、まさにこうした事情が絡んでいるものと思われる。加えて、パットナムの依拠する様々な指標があくまでもアメリカの歴史的・社会的あるいは政治経済的背景を帯びたものであって、一概にソーシャルキャピタルの測定に活用できるわ

けでは必ずしもないとの指摘<sup>(1)</sup>がなされていることにも注意しよう。これらの事態は結局のところ、パットナムが使用する様々な指標そのものへの妥当性を検討するよう我々に迫るものになっていると思えてならないのである。

次にソーシャルキャピタルを凋滅させるに至った要因としてパットナムが止目した要因に向けられた疑義や批判についてみてみよう。例えばテレビの視聴に関していえば、それがソーシャルキャピタルの弱体化と関連していると彼が指摘するのは、その内容がニュースよりも娯楽的なものの方が増えてきたことに加え、その視聴スタイルも選択的なもの——すなわち、特定の番組を見るときにのみテレビをつけ、それ以外のときにはスイッチをきっているスタイル——から習慣的なもの——すなわち、何をしているときでもとりあえずテレビをつけっぱなしにするスタイル——が一般的になってきたからである。こうした視聴スタイルは必然的に社会参加する時間を人々から奪うとともに、彼ら／彼女らの「無気力lethargyや受け身性passivityを助長する可能性がある」（Putnam2000：238=2006：290）というわけなのだが、これもまたパットナム自らも言及しているように、あくまでも相関関係であって因果関係ではない。「もともと社会的に孤立した人々は、緩慢な、最小限の抵抗として、テレビに引き付けられるようになる」（Putnam2000：235=2006：285）とも考えられるのだから。さらに今日でもテレビ視聴よりもインターネット使用のほうに多くの時間が費やされつつあるのだが、それでも上でもみたようにある種の市民的なつながりを醸成しているという側面も忘れてはなるまい。

また、人々の郊外への移動が既存コミュニティを消滅させ結果としてソーシャルキャピタル低下の惹起を招いたとパットナムは考えているのだが、土屋（土屋2007）が紹介しているように例えばR.フロリダはむしろある種の人々の郊外への移動は当該地域で新たなコミュニティ形成につながっていることを実証的に明らかにして結果としてパットナムの主張に異を唱えている。

提出されているこれら一連の批判や疑義は「ソーシャルキャピタル」というパットナムの用いる鍵概念のある種の曖昧さがもたらすものだといってよいように思われる。すでにみたようにそれは敷居の低さつまり「誰でも感覚的に受容でき議論に加われる良さがある」一方で「学問的な厳密性に欠ける」（稲葉 2011a：7）のである。だからといって概念を厳密に定義しなおすことそれ自体が目的化して

してしまうとしたら、それはそれで問題であろう。確かに稲葉が強調するように、その広い意義は「人々や組織の間に生まれる協調的な行動を分析する」ことにあり、いわばその道具としてソーシャルキャピタルという術語が採用されているのだから。であるとするならば、その道具の切れ味を少しでも鋭くすべく鍵となる概念を精緻化する作業が不可欠となってこよう。冒頭でも触れておいたように本稿ではこの点をふまえ、改めてパットナム自身の議論からソーシャルキャピタルという概念の立体的な理解につなげ得る視点を抽出することを目指すものである。

そこでここでいま彼自身による定義づけに立ち返ってみることにしたい。先の章で確認したように、ソーシャルキャピタルなる契機がもつ特性としてパットナムがまず指摘していたのは、その根底にある契機としての互酬性が特定の/一般的という2つの側面をもつという点であった。さらに彼は、それが個人的側面と集会的側面、および私的側面と公的側面をもつということにも言及していた。このうち、互酬性が特定のか一般的かという点についてはソーシャルキャピタルの類型化—すなわち結束型か架橋型か—にも通じるものとされていた。使い勝手もあるのかこの類型化については、特にインターネットコミュニティやNPO・地域行政などを実証的に考察する論考（河井2007、櫻井2012、河田2015、田村2015など）で注目され援用されることが多いのだが、パットナム自身の言及を振り返るならば、両者の類別はあくまでも相対的なものでしかない。実際のところ、両者の類型化を重要なものだといいつつも、意外にも『孤独なボウリング』における叙述の中で彼が特に注意を割いている個所はほとんど見当たらない。むしろそれよりも目につくのは、ソーシャルキャピタルのもつ個人的側面と集会的側面ならびに私的側面と公的側面へ注がれるパットナムの論及なのである。この点について章を改めてみていくことにしよう。

### 3. 抽出されるまなざし——ソーシャルキャピタルの2つの座標軸

ソーシャルキャピタルの個人的側面と集会的側面についていえば、その主著の中では次のように論及されている。すなわち、政治参加の低下について触れた章において、役員を務める・政党のために働く・集会に出席する・署名をする・投書をする等の12の指標の経年変化をつぶさに観察したのちにパットナムは、それ

らが同様の低下をみせているわけではないということに注意を促している。彼によれば、このうち顕著に低下傾向を示しているのは「コミュニティレベルにおける組織活動」（Putnam 2000：44＝2006：48）すなわち「務める」「働く」「出席する」といった他者との協力活動action in cooperation with othersなのであって、「署名する」「投書する」といった個人でなしうる活動ではない。前者は活動が自分以外の他者の活動に依存しているのに対して、後者はペンやキーボードがあれば一人でなしうるものactions that one can undertake as an individualだということである。

彼が一見なにげなく行っているかにみえるこの指摘は、ソーシャルキャピタルという概念をとらえ直すうえできわめて重要だと思われる。というのもそれは、表面的には「ソーシャルキャピタルの弱体化」と括られている事象が実はそう単純なものではないかもしれないということを示唆しているからである。この部分に続けてパットナムが行っている次のような指摘にも注目してみるとよい。「このような協調問題やただ乗り問題に対して最も脆弱な市民的関与形態——市民が共に集うような活動activities that brought citizens togetherであり、そしてソーシャルキャピタルを最も体現しているのが明らかな活動——こそが、最も急速に衰退しているのである」（Putnam 2000：45＝2006：49）。

彼が強調するのは、政党組織等の役員を務めるというような『協同的』cooperativeな形態の行動こそが、署名や請願をするといった『表現的』expressiveな形態の行動よりも急速に低下したという点である。「協同にはすくなくとも二人が必要だが、自分自身を表現するには一人しか必要でない」。彼のこの指摘を過小評価するべきではない。互酬性が一般的か特定のか——換言すれば、ソーシャルキャピタルが架橋型か結束型か——にまつわる類型化を相対的なもののだとしてその主著において自身が強調したほどには深く掘り下げられることがなかったのに対して、それが個人的活動によって生み出されるものなのかあるいは複数の活動すなわち他者との協同で営まれるものなのかについての区別には、並々ならぬアクセントが置かれているということがわかるだろう。つまりこの点にこそまずはパットナムの論考の実質的なポイントを見て取ることができるのである。

実際のところソーシャルキャピタルを惹起しうるこの「個人的活動」と「協同的（集会的）活動」の区別の意義については、その弱体化をもたらす要因につい

て考察される13章においても再び取り上げられている。このことから、この2つの識別がそれなりの重要性を帯びているということが了解されるように思われる。その章における考察によればテレビの視聴が大きく関わるのは、個人的形態の市民活動ではなく、他者と共に行う集合的活動だというのである。「すなわち、余暇時間を私事化したのと同様にテレビは市民的活動も私事化しit also privatizes our civic activity、個人的政治活動を低下させた以上に他者との相互作用を急速に衰退させたのである」(Putnam 2000: 229=2006: 279)。このような指摘をみるかぎり、ソーシャルキャピタルが一般的互酬性に基づくものか特定の互酬性に基づくものかという類型化以上に、それが個人的活動によって醸成されるものなのかあるいは集合的・集团的協働によって醸成されるものなのかという区別・類型化のほうがはるかに有意だと考えられるわけである。

さらにいまここで、“私事化するprivatize”という術語が用いられていることも見逃さないようにすべきだろう。それは、活動が個人的な営為か否かという区別だけでなく、もうひとつの重要な区別・類型化を彫琢するものになっているからだ。すなわちそれは、私事化か非私事化かともいうべき軸で描くことができる概念的図式にほかならない。ここでいう非私事化とは私事化——あるいは私的側面の顕在化といってもよいだろう——の対概念と位置づけるものだという意味で「公的」側面の顕在化をさすものと考えることが許されるであろう。

さて、いまここでそれが顕在化するか否かはさておくとして、ソーシャルキャピタルのもつ「私的」側面と「公的」側面の2つの分類が思いのほか重要なものであるとの見立ては、あながちの外れなものではあるまい。このことは、これもまたパットナムがわざわざ章を割いてまで、インフォーマルなソーシャルキャピタルに関して考察を展開していることから首肯しうるように思われる。フォーマルな活動に多く関与する人々とインフォーマルな人間関係を優先する人々をイディッシュ語にならってそれぞれ「マッハー」「シュムザー」と彼は定式化する。前者すなわちマッハーが「現在の出来事を追い、教会やクラブの会合に行き、ボランティアを行い、慈善寄付をし、コミュニティ事業のために働き、献血をし、新聞を読み、スピーチを行い、政治に関心を持ち、頻繁に地域集会に参加する」のに対して、後者すなわちシュムザーは「ディナーパーティーをし、友人と出かけ、トランプで遊び、しばしばバーやナイトスポットに行き、バーベキューを

し、親戚を訪ね、季節の挨拶状を送る」(Putnam 2000 : 94=2006 : 107) というわけだ。そのうえで、この2種類の関与の仕方は「一定の重なりoverlap」があるものの「実証的観点からは、両者は明確に区別異なるas an empirical matter, the two syndromes are largely distinct」(Putnam 2000 : 94=2006 : 107) のだと彼は強調する。

注意しておくべきは、ここでいうフォーマル・インフォーマルについての彼の認識である。一見するとそれは組織だっているか否かという形態に関する識別にも思えるのだが、たったいまみたように明らかにそうではない。むしろ両者の分別は、その活動が公益に資する余地があるものかそれとも純粋に私的嗜好性の高いものか、言い換えればまさに「公的」なものか「私的」なものかという区別そのものにほかならない。そしてこう定式化したうえでパットナムはここでもまた多くの指標を根拠に、現代アメリカ社会においてはシューザーすなわち私的なつながりの減少以上にマッハーすなわち公的なつながりのそれが目立つのだと結論づけるのである。

ただし彼の歯切れはそういいものではない。というのも指標によっては、シューザーすなわち私的なつながりはなお根強く残存していたり、見方によっては微増すらしたりしているととらえることもできるからだ。それでもなおアメリカのソーシャルキャピタルの低下を説得的に強調しようとするのであれば、シューザーではなくマッハーに焦点を合わせその減退をこそソーシャルキャピタルの減退とほぼ同義にとらえることが論理的には必要になってくる。つまりその「私的」側面よりも、「公的」側面に一層の照準をあてないかぎり、ソーシャルキャピタルが弱体化したとする結論を下しようがなくなってくるのである。そのためにはいうまでもなく、ソーシャルキャピタルの「私的」な側面と「公的」な側面の区別を貫徹することが、議論を展開するにあたっての大前提となってくるわけだ。これはある意味での論点先取にも近い。ソーシャルキャピタルについてパットナムの行う定義は、「特定の集団や活動——例えばキワニスクラブやPTA、または請願への署名といった地方政治への参加活動——を前提にしたものであり」「よりインフォーマルな人脈more informal channelsを通して我々が目下経験している関係性を卑小化trivialiseしている」(Kiesling2000 : 132) との批判はまさにこの点に向けてストレートになされたものだとみてよいだろう。

ここでいま、互酬性を特定の・結束型なものとな一般的・架橋型なものに区別した際にはその類型化にそれほど固執しているようには思えなかったパットナムの姿勢を想起してみるとよい。たった上でみたように、「私的」側面と「公的」側面に関して彼がとる態度はそれとはきわめて対照的に、両者を峻別するものに終始している。それはそうだろう。繰り返すまでもなく、一部の指標に着目するのであれば、マッハーが衰退しているということよりもシュムーズーが台頭すらしているということは否定しえないのであり、そうである以上、シュムーズー的的局面ではなくマッハー的局面をこそ議論の中心に据えることが必要不可欠になるのだから。

さてこうしてみると、パットナムが意識するしないにかかわらず彼の主張において事実上の主軸とされている契機が改めて浮き彫りになるのではないだろうか。すなわちそれは、個人的—集合的という座標軸と私的—公的という座標軸の2つにほかならない。いいかえると、この2つの座標軸に沿って彼の議論を再構成することではじめてその全体像をつかまえることが可能になると考えられるのである。

#### 4. 個人化と私事化に向けられるまなざし

注意のために付言しておけば、前章までの整理で抽出した2つの座標軸は、様々な形態の繋がりについて、行為の主体とその方向性——すなわち「誰が」「何の目的で」他者と繋がっているのか——に注目するものであり、本稿でなにも恣意的に選び出したわけでは必ずしもない。むしろこの座標軸はソーシャルキャピタルについて、それが「どのような」繋がりを問うものであって、「どのように」繋がっているのかに関するその様態に触れることなく設定されているという点で重要なものになっている。このことを強調しておきたい。いかにそれが理念型であるにしても様態に踏み込んで分類軸を立てようとするなら、その分類はどうしても相対的なものにならざるをえない。場合によってはその分類そのものが曖昧なものになってしまう可能性も排除できまい。このことは、例えば架橋型—結束型という類型をパットナムが準備しておきながら、その類型化を議論の中で十分に活用できないでいることをみれば明らかだろう。繋がりが個々人による営為な

のか“みんな”で営まれるものなのかという分類や、それが当事者（ら）の私的な利益に資するものなのかそれとも公的利益の実現に向けられたものなのかの分類は、少なくとも様態によるものよりは、そうした事態に陥ることを回避することができるように思われるのである。

さて以上のことをふまえてその主著におけるパットナムの主張をとらえなおすなら、彼によって「ソーシャルキャピタル」として括られていた概念が、私的一公的という軸と個人的—集团的という軸で区切られる4つの象限に原理上は配置できることがわかるだろう。いうまでもなくそれは、①集团的で公的なもの ②個人的で公的なもの ③集团的で私的なもの ④個人的で私的なもの の4つである。

ソーシャルキャピタルの低下状況を表すものとしてパットナムが触れている主な指標をこれらの象限に当てはめるのはそう難しいことではあるまい。例えば、地域コミュニティ・PTA・労組・政党組織等に参加したりそれらにおいて役職についたりすることは①に該当するし、投書したり請願へ署名したり募金に応じたりするといった営みは②にあてはまるものだといえよう。場合によっては、自助グループや宗教的な活動をここに含めてもよいのかもしれない。また趣味を同じくする同士でサークル・クラブ活動を展開したり、余暇を共に過ごしたりすべく形成される繋がりには③のカテゴリーで語りうるものであり、近隣の知人友人との間で醸し出されたりインターネット等を介して維持されるバーチャルな交友関係は④として位置づけることが許されるように思われる。

さてここでいささか唐突に思えるかもしれないが、2×2の4つの象限を用いてなされるこの整理のもつ意義を確認するためにも、パットナムが行っているきわめて興味深い発言についていまみておくことにしたい。その発言は主著『孤独なボウリング』発表の数年後に自身が編者の一人となって刊行した論文集の中でなされたものである。

『流動化する民主主義』(Democracies in Flux) と題されたその論文集は、主著とほぼ同時期に出版された労作にもかかわらず意外にも主著ほど注目されていないとの印象も否めないもののだが、それはさておき、アメリカのほかイギリス・ドイツ・スペイン・日本などの8か国のソーシャルキャピタルのありようについてそれぞれの論者が理論的・実証的に描き出したその論文集の冒頭の章で、

パットナムは編者の一人としてKゴスと共にソーシャルキャピタルという概念について総括的な整理を行っている。注目すべきは、この概念が実に「多次元的なものmultidimensional」であるがゆえにその多寡だけをもって社会の変化をみてとるべきではないと彼らが発言している点である。パットナムとゴスの考えでは、関心を払うべき対象は量ではなく質なのであり、ソーシャルキャピタルの変化もまた質的な変化においてこそ見出さなければならないのだ。

このような基本的態度を表明したうえで彼らは、「ソーシャルキャピタルを理解し評価するために」(Putnam&Goss 2002 : 9=2013 : 8) さしあたって重要な4つの分類基準があるのだという。それらは、必ずしも相互排他的なものではなくむしろ互いに補完しあうものなのだがそれでも概念的には区別可能だと彼らは注意を喚起してみせるのである。その基準とは、「公式formal—非公式informal」「太いthick—細いthin」「内向的inward-looking—外向的outward-looking」「架橋型bridging—結束型bonding」の4つである。

簡単に彼らにならって順に手短かにみておこなうなら、以下のようなになる。ソーシャルキャピタルを、公式に組織化された形態の繋がりがインフォーマルな繋がりがかで整理するものが「公式—非公式」の基準である。すなわちソーシャルキャピタルはまず「組織としての形が整ったものformally organized」と「たまたま居合わせた者が即席のチームを作って行うバスケットボールの試合や、同じパブの常連客のような」(Putnam&Goss 2002 : 10=2013 : 8) 形の結びつきとに区別することができるというわけである。そのうえで、ソーシャルキャピタルに関する既存の業績の多くは、その長期的趨勢をみるにあたって実証的データに基づいて考察せざるをえないために、そうした証拠を参照しやすい前者すなわち公式な形態の繋がりにどうしても注目がちになっているとも（おそらくは自省もこめて）述べている。「太い—細い」の分類基準はいうまでもなく、社会的紐帯を「強弱」という観点から把握したM.グラノヴェッターの指摘に準じたものである。接触の頻度が多く閉鎖性が高いものが「太い」繋がりであり、その逆を「細い」繋がりと定式化することができる。また繋がりが当事者自身の「物質的、社会的、政治的利益の増進を図ろうとする」形態であればそれは「内向的」ソーシャルキャピタルの側面が強いとされ、それとは対照的に利他的・公的利益を志向するものが「外向的」だというわけだ。「架橋型—結束型」の分類については、す

でにみたとおりでありここで改めて繰り返すまでもないだろう。

ところでこれらの分類基準が妥当なものなら、何もわざわざ本稿で改めて分類基準を彫琢する必要もあるまい。しかし既に推察がつくように、パットナムらの言及するこの類型化には若干の難点が看取でき、それをそのまま受け入れるわけにはいかないのだ。まず「架橋型—結束型」の分類についていえば、これらが相対的なものであるゆえそもそも分類基準たりえないという点については先に指摘したとおりである。それが何に関するものであれ、およそ整理軸たりえるには、相互排他性を可能なかぎり担保してはなるまい。しかしこの論文集の巻頭でもまた彼らは次のように発言している。いわく「実際問題としては、大半の集団は、架橋型と結束型を組み合わせるblendいる」（Putnam&Goss 2002：12＝2013：10）のだ、と。また、人々の繋がりが定期的なものか否か、あるいは特定の相手との間で閉鎖的に醸成されるものか否かに止目しているという意味では、「結束型—架橋型」という分類軸と「太い—細い」という分類軸がほぼ重複していることにも注意する必要がある。このことは、『孤独なボウリング』においても両者がほぼ同義に扱われていたということからも容易に理解できるだろう。であるとすれば、この2つの分類軸を取って分けて指定する必要がそもそもないわけだ。

しかもここで看過しえないのは、両者が単に相対的な区別でしかないという点だけでなく、やはりともに形態に関する分類軸になっているという点である。「どのように」繋がりが形成・維持されているかという形態に着目してソーシャルキャピタルを整理しようとするなら、どうしても形態の変化を程度の次元すなわち量的観点から測定せざるをえなくなる。しかしこれは、ソーシャルキャピタルは多様なものであるがゆえに量ではなく質でとらえるべきだとするパットナムら自身の発言と相矛盾する事態を招いてしまう。こうしてみると、いまかろうじて有益なのは「外向的—内向的」に関する分類軸だということになる。そしてこれはまさにパットナムの主著の中から本稿で抽出した座標軸のひとつ、すなわち「公的なものか私的なものか」という分類にほかならないように思われる。ここに至ってようやく、先にみた4象限の分類が一定の妥当性をもつものであることが了解されるのではないだろうか。

さてそうだとすると、次に取り込まれるべき課題も浮き彫りになるだろう。重

要なのはこうした分類そのものではない。パットナムの問題関心にひきつけるなら、「ソーシャルキャピタルの低下」として彼がみてとった事象がこの象限の中でどのように定位されるかという点もまた、明らかにされなくてはなるまい。

## 5. ソーシャルキャピタルの「低減」——その個人化と私事化が意味するもの

すると、いまや全容は明らかだろう。ソーシャルキャピタルの「低減」として把握されてきた事象。それは見方を変えれば、ソーシャルキャピタルの「変容」とでもいうもの——すなわち、その関係性の担い手が、複数の人々・組織から個人へと、そして互酬性と信頼の向きも公共的なものから私的なものへとシフトしてきた——と見て取ることができるわけである。前章で立てた象限にひきつけていうなら、①の集団的にして公的な局面から②の公的にして個人的なもの、および③にある集団的にして私的なものへの移行、そして究極的には④象限にある私的で個人的な活動への収斂をこそ、時代のひとつの傾向として描き出さう。20世紀の後半とりわけ1970年代以降アメリカにおいてはそれまで盛んだった政治的・宗教的・市民的諸局面におけるコミュニティ活動が顕著に衰退していったとパットナムは考察しているわけだが、「衰退」として語られているその事象を先の章で立てた4象限に重ねてとらえなおすなら、それは活動の「個人化」および「私事化」とでも定位することが許されるように思われるのだ。もちろんのことながら、パットナムはあくまでも現代アメリカ社会の変容について診断を下しているのであって、その診断を他の社会の時代へと敷衍することは厳に戒められねばなるまい。ただそれでも、ここで剔出した「私事化」と「個人化」という2つの契機は、考察にあたって思考のひとつの——しかし貴重な——補助線を引くものになるのではないだろうか。

まず「私事化」の方からについてみておこう。すでに本稿でも確認してきたように、地域コミュニティや職場・宗教活動等への関与はなるほど確にかつてよりも低調になっているのかもしれない。しかしこれもまたパットナム自身も認めているように、例えば友人を訪問したり食事を共にしたり電話で会話をしたりといった繋がりには依然と比較してもそれほど低減しているわけではない。ある種

の自助グループやサポートグループへの参加にいたっては、逆にむしろ拡大すらしているのだった。知人との交歓や会話あるいは自助グループへの参加といった営みは、社会的課題を解決するためになされる公の活動というよりもむしろ、即自的意味合いをもつものであったりきわめて私的個人的な問題に取り組むものであったり純粋に余暇的なものであったりする。「自助グループは間違いなく、参加者にとって計り知れない価値をもつ情緒的サポートと対人的な絆を提供している。(中略)ある面では、サポートグループは、我々の断片化した社会の中で弱体化している親密な繋がりへの代替となり、より伝統的な社会的ネットワークから切り離された人々の助けとなっている」(Putnam 2000 : 150=2006 : 177)。公共的性格をもつ組織や活動への人々の関与は弱体化している一方で、個々人に精神的な満足感を付与しうる組織や活動は必ずしも魅力をうしなっているわけではないのである。

またソーシャルキャピタルの「個人化」に関しては、これもまた主著におけるパットナム自身の指摘において既に確認しておいたとおりである。組織の役職についたりコミュニティ組織のメンバーとして活動したりする人の数も比率も減ずる一方で、署名にせよ投書にせよ寄付にせよあるいはネットを通じた意思表示にせよ、一人で行う活動に関して言えばそれほど減退しているわけではない。この傾向は、活動や繋がりが公的な性格を帯びたものでも私的な性格を帯びたものでも例外ではないといってよいのかもしれない。言い換えれば、まさにパットナムが自らの主著のタイトルに選んだとおり、ひとりで営む「孤独な」活動が目立つようになってきているとみることができるわけである。

実際のところ、ここにきわめて興味深い叙述がある。それは、先の章でも触れた『流動化する民主主義』という論考集の総括部分におけるパットナムの発言である。各国におけるソーシャルキャピタルのありように関する各論者の報告を受ける形で彼は次のように述べている。すなわち、それぞれの国々には「より広い社会的目的」を掲げ「他者との連帯」を説くような組織への参加の減少という共通したパターンが看取しうるのだが、その減少は「非公式で流動的で個人的な形態の社会的結合informal, fluid, personal forms of social connectionの相対的な重要性の増加によって、少なくとも部分的には相殺されているようなのだ」と(Putnam 2002 : 411=2013 : 357)。一見するとこうした「新しい個人主義的

な形態の市民的関与」は社会的・集合的利益に資するものではないようにも思えるのだが、必ずしもそうとは言いきれない含みをもっているとパットナムはいう。「我々の初期的な調査から浮かび上がる重要な仮説は、より新しい形態はソーシャルキャピタルのある種の私事化を示しており、より解放的more liberatingかもしれないが、あまり連帯的ではないless solidaristicというものである」(Putnam 2002: 412=2013: 358)。これはまさに本稿で掘り起こしてきた視線にほかならない。

さてこうしてみると、その主著においてパットナムがしているように「ソーシャルキャピタルが低下してきた」と総括するのはいささか雑駁にすぎることが容易に理解できるだろう。むしろ社会の変化について、さらにより一層踏み込んだ考察が当面の課題として浮上してくるのである。つまり本稿で整理してみせたように、人々の繋がりが“公的なものから私的なものへ”“集団によるものから個人によるものへ”とシフトしてきたとすると、ではそれはいったいなぜなのかという問いかけへの返答——換言すれば、ソーシャルキャピタルの「私事化」と「個人化」がなぜ進行してきたのかそのメカニズムに対するある程度の説得力のある説明——が当然のことながら、準備されねばなるまい。繰り返すまでもなくパットナムの場合は世代変化・テレビの普及・郊外への人口移動および共働き世帯の増加といった4つの要因を社会変化つまり彼のいうソーシャルキャピタルの低減の背景にあるものとしてとらえているのだが、仮にここでみたようにソーシャルキャピタルが一人で営まれかつ私的な色彩の濃い繋がりへと変貌してきたとするなら、その場合にもパットナムの挙げたこの4つの要因ははたして妥当なものとして考えることができるのだろうか。若干駆け足気味になるが、この点についても吟味を加えておくことにしよう。

4つの要因のうち、テレビの普及が人々の繋がりを弱体化したと考えられる理由の1つは、その視聴によって人々が繋がりについての一種の疑似体験を味わうからでもある。「視聴者は実際に、参加する努力なしに、コミュニティに参加している感じを得ることができる。まるでジャンクフードのように、テレビ特に娯楽テレビは、本物の栄養を与えずに渴望をいやしてしまうのである」(Putnam 2000: 242=2006: 294)。しかしそれだけではない。パットナムによればその視聴スタイルの変化もまた重要な意味をもっている。かつては見たい番組がるとき

にのみテレビをつけてみていたのだけれどもここ40年ほど前からは特に見たい番組があるわけでもないけれどもとりあえずテレビのスイッチを入れてそれに見入るといった生活習慣が広まったのだと彼はみる。つまり従来は市民参加やコミュニティ活動に費やされていた時間がテレビ視聴に割かれてしまい、結果としてソーシャルキャピタルを低下させたというわけである。ソーシャルキャピタルの醸成や維持にかかる時間がなくなった——換言すれば人々がますます多忙になった——という点では、共働き世帯の増加もまた同様の作用を及ぼすものとされていることがわかる。

しかしながら、“時間がない”という事情をもってソーシャルキャピタルの低下を説明するにしても、パットナムが度々言及していた様々な事象——例えば、ある種の自助グループ活動の活発化やシューザー的繋がりや台頭あるいはネットを介して生み出される新たなコミュニティへの人々の参入等——については満足いく理解は得難いように思える。忙しいというのになぜわざわざこうした活動には人は参加するのだろうか。また郊外化の進行についても、同様の問いを提起することが可能かもしれない。それまで居住していたところから転居するにしても、ではなぜ人々は新しい居住地でソーシャルキャピタルを作り出そうとしないのだろうか。転居によってそれまで維持されていた種々の繋がりが断ち切れてしまうというのは、一見するとなるほど確かにありうることである。しかし先にも触れたように、フロリダによれば特定の資質をもつ人々が移動先で新たなコミュニティを形成している実際のケースなども少なからず見受けられるのであって、パットナムの議論はこうした点に目配りが足りないとの印象を拭えないように思われるのだ。これらのことはすでに2章でも指摘した通りである。世代の変化からソーシャルキャピタルの変容を理解せんとすることについては、残念ながらいまここで検証するだけの余裕を筆者は持ち合わせていない<sup>(3)</sup>。ただ、やや長期的な歴史を視野に入れるというその姿勢は、一考に値するのではないだろうか。そこでこの点をヒントに、いささか別の方向からソーシャルキャピタルの変容をもたらしうるメカニズムについて最後に触れておくことにしたい。その方向とは、いわゆるポスト共産主義国家における人々の社会参加に関する知見に目を向けるものである。

繰り返すまでもなく、ここで定式化できたのは、散見される繋がりが「個人的」

で「私的」な色合いをますます強めるようになったという事態であった。言い換えればそれは、「公的」「集团的」な繋がりからの一種の隠遁にも近いものだとみることが許されよう。ところで、「公的」で「集团的」活動に人々が没入する社会として典型的なものとしては、共産主義国家がある。そこでは国家もしくは党が主導する形であらゆる場面で市民生活が統制・管理されているわけだが、例えばロシアや旧東ドイツをはじめかつての社会主義国家においては1989年の民主化後にまさにソーシャルキャピタルの「私事化」と「個人化」とでもいいうる同様の事態が起きていることを、豊富な実証データやいくつかのインタビュー調査をもとにM.ハワードは明らかにしている。それらの国々では宗教活動・スポーツ/レクリエーション・教育/文化/芸術活動あるいは職場での活動・労働運動・政治運動などを行う様々な集団が作られ人々を参加動員させていたのだが、民主化後は人々の参加が低調となり「ポスト共産主義社会における市民は今日、自発的に作られた様々な組織のメンバーに全くといっていいほどなろうとしないしまた参加もしていない」(Howard2003:16)と彼はいう。

その背景としてハワードが挙げているのは次の3点である。すなわち、第一に組織活動そのものへ人々がもつ不信感、第二に強力な私的繋がり存在、そして第三に新体制への失望である。ハワードによれば、かつての共産主義体制では人々は半ば強制的に公的活動等に動員されたために、民主化後も集団組織で活動することに対しては拒否的な反応を示すことが少なくない。また、共産主義時代には乏しい物資やサービスまたは情報入手すべく私的なコネ・親密なネットワークが発達したのだが、これらが民主化後も十分に残存しているために他者とわざわざ新たな組織を作ってそれに参加したり活動したりする必要性を人々がそもそも感じていないとされる。さらに多くの人々が自由で民主的な新しいポスト共産主義体制に期待していたのだが、民主化は同時に一連の政治的社会的混乱をもたらすものであった。民主化に対する期待があまりにも過度なものであったがゆえに、人々はこれらの状況に対して抗議の声をあげることもすらなくなり、逆に公的活動からの遁走を決め込んでいるというのである。<sup>(4)</sup>「失望した人々はますます組織に参加しようとしなくなるし、彼らの幻滅や不満はさらなる受動性と撤退につながってゆく」(Howard2003:109)。パトナムがしたように、ここにもまた世代の変化や人々の価値観の変化をみてとることができるようにも思う。逆にい

えば、人々の繋がりの多くが徐々に私的で個人的な営みへとシフトしていく背景には、ハードが着目してみせているように政治制度や体制の変化および、それらがもたらす社会というものに対する人々の感受性とでもいったものの変化もまた関係しているとみることができのかもしれないのだ。いずれにせよこうしたものを視野に入れることによって、繋がりの変化もまた一層立体的に理解することが可能になるのではないだろうか。

## 6. むすびにかえて

さてこれまでパットナムの著者に焦点をしばり、彼が言及するいくつかの論点を整理検討してきた。この作業を通じて「ソーシャルキャピタルの減退」と捉えられている事象が「ソーシャルキャピタルの私事化と個人化の進行」とでもいいうる側面を帯びるものであることを確認してきた。

ところでいま繋がりの「私事化」という側面を「公的活動からの隠遁」ととらえるなら、この事態の広まりについて考察した先行業績が少なからず蓄積されているということに容易に気付くであろう。例えばそれらには「公共性の構造的変質」とみたH.ハバーマス（Habermas1960=2001）や「公的生活における集団的アイデンティティの消滅とある種のナルシシズムの動員」とするR.セネット（Sennett1977=1995）の議論などがある。あるいはほかに、20世紀アメリカ社会に関して壮大な論考を展開したD.リースマン（Riesman1950=1955）や、21世紀キューバ社会における若年層の社会参加の低下について第一線で議論し続けているM. ドミンゲス（Dominguez 1998a,1998b,2000,2003）らの名を挙げてもよいのかもしれない。つまり「私事化」という契機に関していえば、ある程度の知見がすでに提出されているのでそれらを再検討することによって、そのメカニズムについてより深い理解を得ることが可能になるように思われるのである。

しかしながら私見によれば、パットナムの議論の整理から浮き彫りになった興味深い点はむしろもうひとつの側面すなわち「個人化」にある。ネットやSNSの普及によって、依然とは比べものにならないくらい容易にかつ瞬時に人々は繋がりを形成・維持できるようになっている。それはもちろん私的な趣味関心を軸にしたものもあるだろうが、他方ではボランティアの募集や活動にかかわるもの

であったり募金・クラウドファンディングを呼びかけるものであったりすることも珍しくはない。ときには各自が情報を持ち寄ったり署名・請願に参加したりすることで、公的問題の提起や解決につながることもすらありうるのが実情だ。

そのとき彼ら/彼女らは現前に不在の他者とともに、しかしまさに「一人で」活動していることになる。このことが示唆するのは、私的なものにせよ公的なものにせよ人々が一時的ながら「みんな」と繋がりをもつということ、しかしながらその繋がりを継続維持させること自体にはさほど意義を見出しはしていないらしいということにほかなるまい。換言すれば、ある種変幻自在な「われわれ」が醸成され各自がそれに一種の帰属意識を見出しているとみることができるわけである。例えば我が国においても、東日本大震災や西日本集中豪雨等の自然災害あるいは沖縄首里城の消失や京都のアニメ製作会社の火災といった事案の際をみるまでもなく、一時的ではあるかもしれないが多くの人がボランティアに駆けつけたり募金活動に参加したりしている。こうした活動は、確かにアニメや沖縄への私的な思い入れあるいは自らもまた同様の被災体験を味わったがゆえに同じ経験をしている人々に少しでも役立ちたいというきわめて私的な動機を出発点に、かつ、個人を主体として営まれるものではあるのだが、だからといって単なる個人的趣向や趣味にとどまるものでは決してない。実際の活動・行為はきわめて個人的になされるものの、しかしそれらは各人が他者の存在を十分に認識したうえでなされているという意味でまさに「ソーシャル」なものになっているのである。

これまでも例えば3章でみてきたことからわかるように、パットナム自身はこうした繋がりを過小に評価しそもそも「ソーシャルキャピタル」たりえないとまでいわんばかりの冷淡な態度をとっているわけなのだが、今日こうした繋がりが日常的に看取できるのであればやはりその事態を正面から取り上げて解明してしかるべきであろう。とりわけ世界にも先駆けて急速な少子化・高齢化を経験しつつある我が国においてはなおさらのこと、ソーシャルキャピタルの個人化と私事化という、これまで十分に取り上げられてきたとはいいがたい現象を紐解くことこそ、未来を見据える貴重なヒントを与えてくれるように思えてならない。

「ソーシャルキャピタル」という術語を用いて現在さまざまな学問分野から考察がなされているのだが、“社会的厚生に資すべき実践の模索”といった性質の

ものが少なくないということは見逃すべきではない。つまり、民主主義の維持や地域の再生あるいは経済／産業の発展もしくは教育・医療・福祉の充実のためにどのような繋がりが社会的に有用なのか、望ましいソーシャルキャピタルのありようを追究せんとする試みが多く散見されるのである。こうした試みそれ自体は、それはそれできわめて有意義であるということは改めて指摘するまでもない。もともとパットナムの議論もまた、その副題に「米国コミュニティの崩壊と再生」とあったことから容易に想像がつくように、広義の政策提言を念頭に入れているのはまず間違いないところではあるが、しかし単に「あるべき論」に終始してしまうのであればそれは、「ソーシャルキャピタル」という概念やそれをもとに展開される議論の豊饒さをかえって無為にしかねないようにも思えてならない。冒頭にも触れたように、本稿ではこうした問題意識をもとにパットナムの著書に注目してきたわけであるが、この試みがどれほど成功しているのか（あるいはいないのか）という検証や、また本稿で整理した視座のさらなる精緻化等、手つかずで残された課題は多い。それらについては取り組むことは別稿に譲りたい。

## 注

- (1) 稲葉（2011a）に所収されている座談会で吉野諒三は、各国の歴史的・社会的・政治的背景を視野にいれてソーシャルキャピタルを研究すべきだと発言している。同様の指摘は稲葉2014によってもなされている。
- (2) ソーシャルキャピタルを類型化する作業はすでに多くの論者によってなされているが、その殆どがパットナムに引きずられる形で「架橋型」「結束型」という分類を過度に重視しているように思える。誤解を恐れずいうなら、本稿でも述べたとおりこの分類自体は表層的・相対的なものにすぎず、それほど重要なものではないのではないだろうか。
- (3) 筆者はかつて、世代変化とソーシャルキャピタルの変容の関係についてのパットナムの議論が、アメリカ以外のケースにも応用可能ではないかと検討してみた。詳しくは竹本2012を参照されたい。
- (4) ここに、A.ハーシュマン（Hirschman1970=2009）による「離脱」と「発言」に関する考察を重ね合わせると一層理解しやすくなるだろう。

- (5) ドミンゲスの議論については例えばDomnguez (1998a), Dominguez (1998b), Dominguez (2000), Dominguez (2003) などに詳しい。これらを紹介したものに竹本 (2008) がある。またキューバの貧困家庭の現状についてソーシャルキャピタルの観点から考察したものとしてはRamirez (2016) がある。

## 文献リスト

- DeFilippis, James (2001) "The myth of social capital in community development"  
*Housing Policy Debate*, Vol.12-4 781-806
- (2002) "The Symposium on Social Capital: An Introduction"  
*Antipode*, Vol.34-4, 790-95
- Dominguez M. Isabel (1998a) "Generaciones y mentalidad" *TEMAS* 26-34
- (1998 b) "La juventud cubana en una epoca de crisis y recuperacion"  
J.Morreno y otros compi., *CUBA : Period especial editorial de Ciencias Sociales La Habana*, 223-49
- (2000) "La integracion y desintegracion social de la juventud cubana a fines siglo" *informe de Centro de Investigaciones Psicologias y Sociologias (CIPS)*
- (2003) "Juventud Cubana y Participacion social" *La Sociedad Cubana; Retos y Transformaciones*, CIPS 65-87
- Edwards, Bobb (1998) "Civil society and social capital beyond Putnam" *American Behavior Scientist* Vol.42-1, 124-, Gale Academic Onefile (<https://link.gale.com/apps/doc/A21107508>・AONE?)
- Fine, Gary et. al (2004) "Myths and Meanings of Bowling Alone" *Society* Vol. 41-6 47-9
- Gubbins, Ed, (2007) "Bowling Alone Nonsense Telephony" Vol.248-1, *Prism Business Media* 21
- Habermas, Jurgen (1962) *Strukturwandel der Offentrichkeit* (=1973 細谷貞雄訳『公共性の構造転換』未来社)
- Howard, M.Morje (2003) *The Weakness of Civil Society in Post-Communist Europe*, Cambridge U.P.
- 稲葉陽二 (2011a) 「ソーシャル・キャピタルとは」 稲葉陽三ほか編『ソーシャル・キャピタル

- のフロンティア』ミネルヴァ書房 1-9。
- 稲葉陽二 (2011b) 『ソーシャル・キャピタル入門』中央公論新社。
- 稲葉陽二編2014 『ソーシャル・キャピタル「きずな」の科学とは何か』ミネルヴァ書房。
- 河井孝仁 (2007) 「社会関係資本を築く地域情報デザイン」菅谷実ほか編『ネット時代の社会関係資本形成と市民意識』慶応大学出版会71-107。
- 河田潤一 (2015) 「ソーシャル・キャピタルの理論的系譜」坪郷實『ソーシャル・キャピタル』福祉+α7 ミネルヴァ書房20-30。
- Kiesling, Lynne (2000) "Book Reviews Bowling Alone" *Cato Journal* Vol.20-1 ,131-33
- 近藤克則 (2011) 「座談会—ソーシャル・キャピタルの多面性」稲葉陽二ほか編『ソーシャル・キャピタルのフロンティア』ミネルヴァ書房 11-36。
- Putnam, Robert (2000) *Bowling Alone—The Collapse and Revival of American Community*, New York, Simon&Schuster Paperbacks (=2006、柴内康文訳『孤独なボウリング—米国コミュニティの崩壊と再生』柏書房)。
- Putnam, Robert & Kristin Goss (2002) Introduction *Putnam ed. Democracies in Flux*, Oxford University Press 3-19 (=2013 猪口孝訳『流動化する民主主義』ミネルヴァ書房 1-17)。
- Ramirez, Diana (2016) "Capital social y familias pobres" *Angela Farias coord. Desigualdady Problemas del desarrollo en CUBA*, La Habana, Universidad de la Habana 165-75
- Riesman, David 1950 *The Lonely Crowd* (=1955 加藤秀俊訳『孤独なる群衆』みすず書房)
- Rin, Lin, (2001) *Social Capital -A Theory of Social Structure and Action-*, Cambridge University Press (=2008筒井淳也ほか訳『ソーシャル・キャピタル 社会構造と行為の理論』ミネルヴァ書房)。
- 櫻井義秀 (2012) 「ソーシャル・キャピタル論の射程」櫻井ほか編『アジア宗教とソーシャル・キャピタル』明石書店。
- Sennett,Richard (1977) *The Fall of Public Man*, Cambridg U.P. (=1995 北山克彦ほか訳『公共性の喪失』晶文社)。
- 鹿内康文 (2006) 『孤独なボウリング』訳者あとがき369-383。
- 高崎経済大学付属産業研究所 (2011) 『ソーシャル・キャピタル論の探求』日本経済評論社。
- 竹本達也 (2008) 「キューバにおける社会意識—社会主義制度をとりまく現状からみた日本の課題」『社会学研究科紀要』8、四国学院大学大学院社会学研究科、21-42。

- (2012)「パットナムのソーシャルキャピタル論の再検討—世代と時代経験へのまなざしを用いて—」『社会学研究科紀要』10、四国学院大学大学院社会学研究科、29-46。
- 田村哲樹 (2015)「ソーシャル・キャピタルと熟議民主主義」坪郷實『ソーシャル・キャピタル福祉+α7』ミネルヴァ書房、42-51。
- 坪郷實 (2015)「ソーシャル・キャピタルの意義と射程」坪郷實編『ソーシャル・キャピタル福祉+α7』ミネルヴァ書房、1-17。
- 土屋大洋 (2007)「インターネット・コミュニティの変容—社会関係資本と創造性資本による検証」菅谷実ほか編『ネット時代の社会関係資本形成と市民意識』慶応大学出版会、133-53。